

関西4私大生命科学 ネットワーク構築に向けて

今中 忠行



今日本には約780の大学が存在する。国立大学法人が86、公立大学法人が95、私立大学が約600校である。それらの中で学術的評価が高い(世界大学ランキングが高い大学)のがいわゆる旧帝国大学を中心とした国立大学であるだろう。これは歴史的な流れからまぎれもない事実であるが、将来は本当にこのような現象が持続するのだろうか。

一方、研究の世界における機器や研究手法の発達が目覚ましく、研究のあり方や考え方が数年単位で変わっている。また、東南アジアを始めとした新興国の台頭もめざましく、我が国の生命科学がさらなる発展を遂げるには新たなイノベーションの創出が必要とされている。

生命科学分野において先進国であるアメリカでは、1位がスタンフォード大学、2位がハーバード大学、3位がマサチューセッツ工科大学、4位がカリフォルニア大学バークレー校、5位がカリフォルニア工科大学である。トップレベルの評価を受けているのはほとんどが私立大学である。そこには優秀な研究者が育つ豊かな土壌があり、彼らの卓越した研究がイノベーションや新たな産業を生み、さらに優秀な人材と資金が集まり、より魅力的な研究環境になる、という理想的な発展の循環が存在している。しかし、日本においてそのような成功事例は未だ成立していない。

過去10年間で、自然科学分野のノーベル賞(物理学賞、化学賞、医学生理学賞)を受賞した日本人は8人である。特に、iPS細胞の樹立においてノーベル賞を受賞した京都大学の山中教授の話題は、世界に大きなインパクトを与えるとともに、日本の研究レベルが世界に通用することを改めて示すこととなった。生命科学研究が盛り上がりを見せる今、次なるノーベル賞級の研究を生み出すため、そして世界に誇れる研究と新たな産業を生み出すため、これまで個別に教育研究を進めてきた私立大学が連携することがきわめて重要になってきたということができよう。歴史ある国立大学には層の厚い研究者群が存在するが、私立大学では連携することによりその弱点を補う必要がある。幸い関西には関関同立(東から呼べば立同関関)と呼ばれている大手私立4大学が近くに存在している。2012年に生命科学関連の学部・学科の代表者が会談し、連携を進めていこうということになった。具体的には、関西大学化学生命工芸学部、関西学院大学理工学部生命科学科、同志社大学生命医科学部、立命館大学生命科学部が協力して、新たなイノベーションを起こすべく「私大生命科学ネットワーク」を構築し、関西を

起点として我が国の生命科学の活性化を図ろうというものである。2008年4月に立命館大学に生命科学部が開設され、2012年に大学院である生命科学研究科がスタートしたこともあり、2012年12月22日(土)に立命館大学びわこ草津キャンパスでキックオフミーティングを開催した次第である。

「世界に挑む」という意気込みのもと、関西4私大生命科学シンポジウムの内容は以下のとおりであった。

第1部 関西4私大紹介セッション

各大学の学部長による大学紹介

第2部 特別講演

立命館大学 久保 幹教授による講演「微生物の力で、土壌を豊かに」、(株)リバナCEO 丸 幸弘氏による講演「ライフサイエンスイノベーションが始まった」がなされた。

第3部 パネルディスカッション 「私大ネットワークの先に見えるもの」

では会場からの意見も含め活発な討論がなされた。

今回のシンポジウムで示されたアイデアは以下のとおりである(図1)。

【Phase I：モデル構築期】

関関同立連携による私大ネットワークのモデルの構築

- ・大型機器の共有化による研究促進
- ・研究プロジェクトの有機的な連携
- ・単位/授業相互乗り入れによる「幅広い視野」および「高い専門性」を有する学生の育成
- ・研究および人材の多様化によるビジネス化の促進
- ・連携による学生確保の優位性向 など。

【Phase II：モデル拡大期】

関関同立モデルを全国に移転/連携

- ・関東私大にてネットワーク形成
- ・地方私大にてネットワーク形成
- ・ネットワーク間での合同プログラム など。

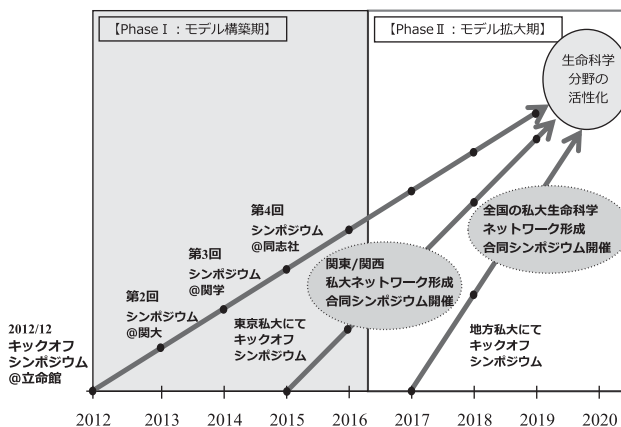


図1. シンポジウムで示されたアイデア